

日本心理学会若手の会

The Early Career Psychologists Committee
of the Japanese Psychological Association



NEWS LETTER

Vo.1 No.2 2016



CONTENTS

- ・異分野間協働懇話会のお知らせ
- ・若手科学者サミット参加報告
- ・第 31 回国際心理学会議（ICP2016）若手の会企画報告
- ・韓国心理学会「日中韓 3 カ国シンポ」参加報告
- ・ヒューマンインタフェース学会参加報告
- ・私のキャリアパス（佐藤隆夫先生・立命館大学総合心理学部長・教授・日本心理学会常務理事）
- ・活躍する若手（黒田剛士さん・静岡大学、武藤拓之さん・大阪大学大学院）
- ・若手の会による新たな試み
- ・編集後記

異分野間協働懇話会のお知らせ

昨年度、多くの若手の会会員に参加していただきました「異分野間協働懇話会」を、今年度も開催します！同懇話会は、分野や研究／実践の枠にとらわれず、様々な若手心理学者がアイデアや意見の交換を行うことで、新たな研究や実践のあり方について議論を深めることを目的としています。

詳細についてはメーリングリストや特設ホームページでお知らせいたしますが、日程および場所が決まりましたので先にお知らせします。まずは、スケジュール表への記入をお願い致します。今年度も多くの方々のご参加をお待ちしています！



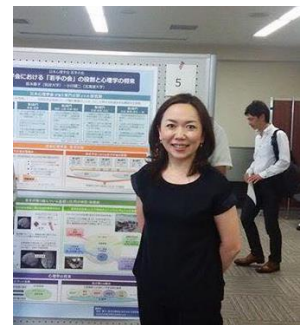
異分野間協働懇話会@横浜
(2016 年 3 月)

日 時：2017 年 3 月 6 日（月）～7 日（火）

場 所：[コープ・イン・京都](#)

若手科学者サミット参加報告

7 月 10 日に、「若手科学者サミット」（日本学術会議若手アカデミー若手科学者ネットワーク主催）が開催されました。教育や顔から化学や家禽まで、幅広い分野から 10 学会の参加があり、普段は交流がない若手の方たちと情報交換をすることができました。本会は、「総合学会における『若手の会』の役割と心理学の将来」と題したポスター発表を行い、若手だからこそ担える役割について考えました。また、未だ女性のロールモデルが少ない科学界において、もっと多くの若い世代の女性に科学者をキャリアパスの一つとして考えて欲しく、意識的に男女比を構成している本会の幹事会も話題に上りました。



（鈴木 華子）

第 31 回国際心理学会議 (ICP2016) 若手の会企画報告

《 ECP Social Hour at ICP2016 》

7 月末に横浜で開催された ICP2016 では、日本心理学会の若手の会と ICP2016 の Emerging Psychologists' Program Committee が、学生と若手のためのソーシャルアワーを共催しました。ビールやワイン等の飲み物とアペタイザーを用意したこのソーシャルアワーには、世界各国の 200 名程の学生や若手が参加し、新しい繋がりや美味しい軽食で初日の疲れを癒していました。初めて国際学会に参加する学生や若手にとっては、知らない人との交流やネットワーク作りは容易なことではありませんが、飲食を交えることにより、リラックスした雰囲気の中で多くの人たちと話せる機会になりました。



ECP Social Hour の様子

(鈴木 華子・小川 健二)

《 Invited Symposium 》

若手の会では、2014 年度大会から若手の会企画シンポジウムを開催しており、ICP2016 との共催であった今年度の大会では、世界の心理学会における若手の会の取組みを取り上げた「Early career psychologists' leadership and initiative in Japan and around the world」を開催しました。アメリカからは米国心理学会若手の会前代表の Ayşe Çiftçi 氏、台湾からは若手の会を立ち上げようと奮闘している Yee-San Teoh 氏、日本からは本会代表幹事の小川が、各国における取組みを発表し、その後、もう一人の代表幹事である鈴木がモデレーターとなり、パネルディスカッションを行い

ました。国によってシステム等の違いはあれど、キャリアの中での「若手」が直面する課題には似たものも多く、国を超えた連携が解決の糸口になることもあるのではと感じました。



Invited Symposium の演者 (上)。
発表を行う小川 (左下) と鈴木 (右下)。

(鈴木 華子・小川 健二)

《 Workshop 》

ICP2016 において、若手の会企画ワークショップとして、「Learn from established psychologists: Tips for early career psychologists」を開催しました。講師として Maria Duarte 先生、Merry Bullock 先生、Valérie Cohen-Scali 先生、佐藤隆夫先生をお招きしました。先生方からは、ご自身のキャリア



Workshop でご登壇頂いた先生方

形成や若手心理学者へのメッセージについてお話しいただきました。とくに、若手のキャリア形成において、常に変化し続ける社会の状況を意識して活動すること、そして若手のうちにたくさんの実践経験を積むことの大切さを教わりました。国内外問わず多くの若手心理学者の方にお越しいただき、盛況のうちに終了しました。

(前田 駿太・三浦 佳代子・川越 敏和)

韓国心理学会「日中韓3カ国シンポ」 参加報告

8月19日に韓国・郡山市で開催された韓国心理学会年大会の「日中韓3カ国シンポ」で発表を行いました。今年は「Life and Future of the Young Generation」というテーマで、各国から2名ずつ計6名の発表者が登壇しました。日本心理学会からは小川が最近の日本の心理系の大学院生や若手心理学者を取り巻く状況（大学の教育プログラム改革や国際化、キャリアパスの多様性等）に関する発表を、鈴木が若手の育成に関する日本心理学会若手の会の取り組みやICP2016 Emerging Psychologists' Program (EPP)の取り組みを紹介しました。各国における研究や取り組みを知るだけでなく、近隣諸国と協力して世界におけるアジア心



発表を行う鈴木（上）。
3カ国シンポ企画者の食卓（下）。

理学のプレゼンスを高めていく重要性を認識する機会にもなりました。

(鈴木 華子・小川 健二)

ヒューマンインタフェース学会参加報告

9月6日に東京農工大学で開催された日本ヒューマンインタフェース学会のワークショップに参加しました。「真剣 WAKATE しやべり場」というテーマで、ヒューマンインタフェース学会・日本顔学会・日本心理学会の各若手の会の代表計8名が集合し、設立経緯や活動内容、さらに課題や悩みまでをざっくばらんに話し合いました。活動のテーマや内容は3団体で多様でしたが、若手の力を活かして新しいことや面白いことをする、若手のプレゼンスを高める、学術成果を社会に還元するといった姿勢は共通するものと実感し、分野を超えた若手交流の場になりました。今後も諸学会の若手の会と連携しながら活動していきたいと考えています。



(鈴木 華子・小川 健二)

「私のキャリアパス」 第1回 佐藤 隆夫先生



「私のキャリアパス」のコーナーでは、現在活躍されている研究者または実践家の先生方に、これまでのキャリアパスを紹介して頂き、若手心理学者が参考にするロールモデルを提供して頂くこ

とを目的としています。記念すべき第1回は、立命館大学総合心理学部長・教授で、日本心理学会常務理事の佐藤隆夫先生に、現在に至るまでのキャリアパスを紹介して頂きます。



佐藤 隆夫先生
(立命館大学総合心理学部長・教授・日本心理学会常務理事)

【ご略歴】

- 1976 / 4 東京大学大学院人文科学研究科心理学専攻博士課程進学
- 1978 / 9 ブラウン大学心理学部大学院留学
(82.10 Ph.D. in Experimental Psychology)
- 1983 / 3 東京大学大学院博士課程単位取得退学
- 1983 / 4 日本学術振興会奨励研究員 (東京大学文学部)
- 1984 / 4 日本電信電話公社武蔵野電気通信研究所
情報通信基礎研究部 研究専門調査員
- 1986 / 4 (株) エイ・ティ・アール視聴覚機構研究
所視覚研究室 主任研究員
- 1987 / 4 (株) エイ・ティ・アール視聴覚機構研究
所視覚研究室 主幹研究員
- 1990 / 11 NTT 基礎研究所情報科学部 主幹研究員
- 1995 / 5 東京大学大学院人文社会研究科 助教授
- 1995 / 12 同 教授
- 2000 / 4 東京大学大学院情報学環・学際情報学府
教授 (兼任)
- 2016 / 4 現職

【私のキャリアパス】

私は知覚心理学、主として視覚をやっています。つまり、「ものを見るしくみ」について研究しています。とくに、運動や、奥行きを見るしくみを中心に研究を進めてきました。

どうして、動いているものを見て、動いている

とわかるのか？ どうして、運動の方向や速さがわかるのか？ 回りの物や、部屋の中、家の周りの景色が立体的に見えるのか？ そうしたことを考えているわけです。

こうした「知覚」は、目玉から脳までの視覚系と呼ばれる神経システムが実現しています。その意味で、僕の研究は心理学であると同時に、脳科学の一部でもあると思っています。というよりも、僕は、よく (心理学がいちばん偉いと思っているので)、脳科学は心理学の一部であると言ったりしています。

見ることは、脳の働きでもあるけれど、最終的には「心」つまり、意識の問題です。最近は、「見えている」こと、「見えている」と感じていることとは何なのだろうなんてことも考えています。

東京大学に入学して、しばらくは、サッカー部に所属していました。でも、運動部をやっていると、他のことは何にもできないし、へたくそでレギュラーになれそうも無いし、2年の途中でやめちゃいました。負け犬根性です (笑)。

その後は、けっこう勉強していたかもしれませんが。3年生から本格的に心理学をはじめ、それが新しい「遊び」になりました。特に、卒論は楽しかった。僕の大学の心理学科は、その頃、全然面倒を見てくれない放任教育でした。ろくな装置も無いし、論文読んで、自分で、簡単な装置を作っては試行錯誤の日々を過ごしました。でも「遊び」だったので、とても楽しかったです。大学院でもこれは全く同じでした。バイトで稼いだお金を実験につぎ込んで楽しく遊んできました。

大学院の途中から日本の大学に飽きたので、脱走してアメリカの大学へ行きました。はじめは辛かったです。英語が全然わかりませんでしたし、言いたいことが全然言えませんでした。でも、後半は、日本にいた頃と同じパターンの生活をアメリカでも送れるまでになり、大学の装置やコンピュータをいじり倒して足りない物は勝手に作っていました。お金は出してくれたし、やりたい放題

の楽しい日々でした。

現在の専門分野を志した理由はとてもシンプルなものでした。鉄腕アトム世代だし、子供の頃から科学者になりたいかったです。「なりたい」と言うよりは、科学者に「なる」と思っていたんです。小学校から高校まで、模型を作ったり、アマチュア無線にはまったりしていたので（と同時に、サッカー部でもあったけど）、回りは理系に行くと思っていたらしいです。

科学少年の王道と言えば物理学か電子工学科ですが、「でも、それって、あまりに単純なんじゃない？もうちょっと面倒くさいもののほうが面白いかな？」と思い出したのが高校生の頃だったと思います。それで、結局、文学部に行くことにしました。哲学、言語学、社会学・・・と迷いに迷ったのですが、理系と文系の狭間、実験も出来るし、哲学的な妄想にふけることもできるし・・・ということで心理学にたどり着きました。

40年以上、心理学の世界で生きてきてしまったけれど、雑食動物の僕にとっては、これで、正解だったと思っています。自分のこれまでのキャリアパスを振り替えると、まずは「楽しめること」が大切だったのかなと思います。楽しくないことは続かないし、楽しいことは人の倍は時間をつぎ込んでいます。嫌々サッカーをしても上達しないのは、サッカーを楽しんでいる人に比べてつぎ込んでいる時間の量が違うからです。そこで、まず若手の皆さんに「自分は心理学を楽しめているか？」ということ、改めて考えてもらいたいと思います。

そして次に大切なことは「信じること」です。科学者に「なりたい」と言うよりは、科学者に「なる」と信じていた少年時代。アメリカに行っても最後は「なんとかなる」と信じていた留學生活。自分の未来を切り開いたのは、楽しさの上に乗った「信じる」という気持ちでした。

「私のキャリアパス」の第1回目。こんなん

参考になったのかな？？？（苦笑）

「活躍する若手！」第1回
黒田さん（心理学ミュージアム最優秀作品
賞受賞）
武藤さん（学術大会特別優秀発表賞受賞）



黒田 剛士さん
（静岡大学・特任助教）

心理学ミュージアム
の展示室作品として製

作した記事「見えないものが見えている―盲点補完―」に対して、最優秀作品賞をいただきました。教育研究委員会・博物館小委員会の先生方には審査をいただくとともに、本作品の完成にあたって貴重なご助言をいただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。

私は知覚を専門としており、非常勤講師として講義を行うために、錯覚現象の画像・音を作成していました。その中で、錯覚に関する知見を一般の人にもわかりやすい形で伝えたいという欲求が生じ、心理学ミュージアムへの投稿を考えていました。本作品では、錯覚は面白いというだけではなく、それが日常場面でどのように機能しているかを説明することを重視しました。

しかし、実際には製作のために腰がなかなか上がらず、投稿を考えるだけで時間が過ぎていくばかりでした。その中で、今回、同じ研究室の学部生である藤村颯さんが共同製作に手を上げてくれたことで本作品を完成させることができました。彼がいなければ製作に着手することがなく、この貢献は大きかったと思います。

若手のみなさんで心理学ミュージアムを盛り上げるのは非常に良いことだと思います。是非挑戦してみてください。



武藤 拓之さん
(大阪大学大学院・
博士後期課程)

小さい子どもはよく指を使って数を数えますが、私たち大人も、頭だけではなく体を使って何かを考えることがあります。このような身体と認知の相互作用が、私の研究テーマのひとつです。上の写真は今年の夏に開催した「第 1 回身体と認知研究会」の際に撮影したものです。この写真の中で私は研究会のプログラムを手に持っていますが、左右どちらの手で持っているか分かりますか？正解はもちろん右手です。実は、このような左右の認知にも身体性関わっています。

自分の視点とは違う視点から見た時の物の位置関係を判断する認知過程は空間的視点取得と呼ばれています。私たちはこれまでの研究で、空間的視点取得の際に、取得する視点の位置まで自分の体を移動させるイメージが用いられているということを実証してきました。具体的には、相手の位置に近い側の足を前に出すと、反対側の足を前に出した時よりもその人の視点を素早く取得できることや、視点取得課題に対しては手よりも足の反応が速くなるということを明らかにしました。相手の視点に立って考えるとき、人間は考える「足」になるのかもしれません。

研究欲はまだまだ尽きそうにありません。これからも全身全霊、研究を楽しみます！

若手の会による新たな試み

若手の時期は、子育て世代でもある場合が多いことから、若手の会が開催する行事には、お子様を連れての参加ができるよう配慮することを、幹事として決定致しました。若手の会が主催する行事はまだ少なく、現時点では幹事会と異分野共同

懇話会のみとなりますが、様々な方たちが色々な形で関われる若手の会となり、そして、より働きやすい社会を作る一端を担える会になればと考えています。

(鈴木 華子・小川 健二)

編集後記

今号では、みなさんと共に過ごした ICP2016 の活動報告を中心にお知らせしています。また、ICP2016 以降に行われた、国、学問を超えた交流の様子をお伝えすることができました。

前回のニューズレターの発行日を確認したら 6 月 27 日でした。あれからもう半年がたち、気が付けば年末を迎えようとしています。ニューズレターに掲載された活動報告を読み、とても密度の濃い半年を過ごしたのだと再認識しました。

来年は、異分野間協働懇話会でみなさんにお会いし、そこでの交流が若手の会の活動をさらに活発化させる契機にできればと思っています。来年もみんなで若手の会を盛り上げていきましょう！

ではみなさん、今年一年間、本当にお疲れ様でした！（「まだ年を越す準備ができていない（泣）」という方もいるかもしれませんが（笑））。

(高瀬 堅吉)



幹事会の様子。和気あいあいとした雰囲気で行われますが、議題によっては「ガチ」議論が展開されます。

発行：若手の会幹事会

〒113-0033 東京都文京区本郷

5-23-13 田村ビル内

公益社団法人日本心理学会事務局

ips-ecp@psych.or.jp

2016 年 12 月 15 日発行

編集：若手の会幹事会

